第４回福井城坤櫓等復元整備検討委員会　　議事概要

日　時　　令和７年２月１７日（月）　１５：３０～１７：００
場　所　　福井県水産会館６階　大ホール

１．議事
（１）坤櫓等の復元設計について
（仁科委員）
　土塀の復元に「県民から募集する予定の笏谷石の腰板を張る」と書いてあるが、どの程度集まる計画をしているのか。
　もう一つ、櫓の屋根はチタン瓦で、土塀の屋根もチタンだと思うが、土塀の腰板を笏谷石にこだわる理由はなにか。

（事務局）
　往時は土塀の腰板に笏谷石を使っていたため、笏谷石の腰板を張りたいと考えている。
　笏谷石は広く県民から募集する予定だが、県民の気運を高め、櫓の復元に深く関心を持ってもらう目的もあり、募集したいと考えている。石材組合等に聞いたところ、集まるのではないかとの意見をいただいており、もし集まらない場合は購入という方法もあると考えている。

（仁科委員）
　大きい石が必要になるため、簡単に集まるのかな、どういうところに残っているのかなと感じる。屋根はチタン瓦で進めており、笏谷石の腰板だと若干色が違うと思うので、石がなければ、別にこだわらず、腰板もチタンでやればいいのではないかと思う。

（事務局）
　本来なら、屋根も笏谷石でできれば一番よいが、重量の問題や雨にあたると笏谷石は脆く、維持管理が難しい問題がある。腰板であれば雨の被害も少ないため、一部でも往時のものを再現できるという意味では、腰板だけでも笏谷石を活用したいと考えている。

（吉田委員長）
　先日、集落内の神社の狛犬のことで石屋と話した際に、狛犬の台座はかなり大きい笏谷石で、新しい狛犬を替える時に古い狛犬をどうするか聞いたところ、「持っていきますよ」と言われた。「福井城の復元で使える」と伝えたところ、石屋は既にそのことを知っており、「石材組合の方に報告するつもりでいる。」と言っていた。県内の石屋にはかなり知れ渡っていると感じた。腰板の大きさはどの程度か。

（事務局）
　腰板のサイズは、横幅が３６㎝、縦が９０㎝、厚みが９㎝になる。

（仁科委員）
　９０㎝の石がそんなに多くあるとは思えないけど。

（事務局）
　一般的な笏谷石の古石の大きさは３０×１８×９０㎝で、石材組合や造園組合、全部で数十社おり、確認したところ、「あるだろう」とのことで、その古材を使えば土塀の腰板は賄えると聞いている。県民から十分集まらなければ石材組合が保管している石を利用したいと考えている。

（吉田委員長）
　９０㎝あるような石は大変だと思うが、うまく継ぎ足す形で 1、2 尺ぐらいの石を継ぎ足していくという方法を考えてみてもいいのではないか。

（仁科委員）
　史実通りに復元できるのが一番だとは思うが、結構な枚数が必要になる。なかなか難しいと思うが、集まればいいけど。

（後藤委員）
　何枚必要で、総重量は何トンになるのか。

（事務局）
　何トンかは分からないが、枚数は約３００枚必要。

（事務局（国京氏））
　確かに厚さは９㎝、幅は１尺２寸前後、高さは 3 尺だが、復元設計では厚さは 2 寸、幅は 1 尺 2 寸、高さは 3 尺弱になる。１つの古石の基礎石から厚さ２寸の板が２枚取れる。同じ色の板が２枚取れるため、それを接合して１枚の腰板にするという考え方で設計を進めており、寄付してもらう笏谷石が利用できる。足りない部分は、石材組合にまだあることを私も知っており、そちらから入手する方針で考えている。

（吉田委員長）
　山里口御門復元時にも県民に笏谷石の寄付を募ったと思うが、どの程度集まったのか。

（事務局）
　山里口御門の時も募集をかけたが、数件しか集まらなかった。今回はもう少しＰＲ方法を考え、周知を徹底してやっていきたいと考えている。

（吉田委員長）
　県民に働きかけるというのは当然必要なことだと思う。県民の意識の向上にも繋がり、いいことだと思うが、集まらない時のことも考えていって欲しいと思う。

（事務局）
　石材業者にヒアリングしており、どこどこに石があるとの情報も持っている。県民に広く募集したうえで、大口でいただける工事で発生する笏谷石なども活用できればと思う。

（荒井委員）
　木材調達の基本方針について、柱には県産材のスギを使用し、壁材と床材は県産材のヒノキを使用する方針はよいと思うが、木材には内部の赤い部分と外側の白い部分があり、それを壁材と床材でどのように使用していくか、考え方があれば教えてほしい。

（事務局）
　木材は令和７年度に先行調達を発注することを考えている。福井県木材組合連合会の方からは、実際に山から切り出してくる作業から始めると聞いており、白い材と赤い材がどの程度になるか現時点では把握できない状況。実際に発注して伐採した際に赤い材と白い材の割合を確認し、どこにどう使用していくか工事の中で検討していきたいと思う。

（荒井委員）
　基本的には壁材にはなるべく白い材を使っていくのが現実的だと思う。

（吉田委員長）
　山里口御門は基本的にヒノキを使用したが、今回の櫓の場合は、大きい木材がヒノキだと集めにくいというのはある。

（後藤委員）
　往時にはマツと東北ヒバが使用されていたということが明らなのであれば、見本的に、サンプル的にそれを取り入れて、往時に使われていたことや東北ヒバの入手方法や経路が分かると面白いと思う。
　なぜ東北ヒバなのかというストーリーを交え、静岡城や江戸城の普請のところで福井県はどういう木材をどういうルートでどう出していたのかもわかると面白いと思うが、研究はまだ進んでいないのか。

（事務局（国京氏））
　江戸時代の初期からヒバは福井県内に輸入されていた。大安禅寺は東北のヒバだということになっている。また、江戸時代の中期には、東北の山を買い、それを売り渡しているというような研究もある。丸岡城では江戸中期の修理にヒバ材が使用されていた。直接的にヒバが坤櫓に使われていたという根拠はないが、御座所（今の瑞源寺）の建物の本堂と書院はヒバでできており、東北からヒバを持ってきたと考えられる。
　福井ではヒバの植生が少なく、山里口御門ではヒバの入手が難しいことからヒノキを使用した。

（景山委員）
　散策通路で「床石に笏谷石の仕様を検討」とあるが、ここは屋根がついていない。雨ざらしだと笏谷石は滑る。しかし、笏谷石は福井県の石として有名なため、全面を笏谷石にするのではなく、例えば真ん中はコンクリートにして、端にポイント的に笏谷石を使うと車いすの方たちも滑らずにそこを押して歩くことができ、福井らしさが出るのではないかと思う。

（事務局）
　全面に使うか、ポイント的に使うか、今後検討していく。

（吉田委員長）
　柱の間隔は芯々で言うことから、１．５ｍと書くより、柱間隔は１．９ｍで柱の太さがあるから、内法は１．５ｍになると書く方が一般的だと思う。
　階段の耐力壁の内側に物置とあるが、どういうものを置くつもりか。階段を上がろうとすると、左手に物置が見えてしまうのが気になった。

（事務局）
　階段の外側に耐力壁を設けることで階段の下の目隠しになるので、倉庫として使えたらと考えている。階段下は笏谷石瓦や史料を展示するスペースとしての利用に併せて、物置のスペースとする案を記載している。

（吉田委員長）
　耐力壁の図で言うと縦面の壁の位置が階段の柱の 1 つ分右側にくる場合と、今の図の位置とよって使い方が違ってくると思う。今の位置であればここを物置にすれば、展示室からは見えないが階段からは見えるため、物置にするのではなく違う使い方をした方が良い。
　耐力壁はこの方向に長さがあれば、位置はどこでも構わないのか。

（事務局（国京氏））
　吉田委員長のご指摘の場所についても検討しており、そうすると、図の飾り窓の耐力壁がもう少し右側の柱の間に必要になる。そこだけ 1 階と吹き抜けに壁があると往時のイメージが変わってくるため、これを避けることとした。西側の窓は１部耐力壁になるが外観は往時と同じにする。
　構造計算では耐力壁の量が少なく、バランスが重要になることから、様々なパターンを検討し、現在の位置であれば構造計算的に満足できるという結論に至った。

（吉田委員長）
　階段を上ろうとした時に左手にその空間が見えることになる。その場合、物置としても変なものは置けなくなると思う。

（事務局）
　階段を上がる時に物置が見えるのはどうかという意見もあるため、倉庫として使うかどうかは再検討する。目隠しとして階段を上がるところに壁を入れてもいいが、極力往時の姿を再現するため壁を少なくしたいと考えており、その場合は倉庫としない方が良いと考える。

（吉田委員長）
　倉庫ではなく、展示的なスペースという手もあると思う。

（後藤委員）
　将来史跡指定を目指しているとのことだが、認識していなかった。櫓を建てることによってどのような形で史跡指定が取れるのか。

（事務局）
　将来的に国の史跡として指定できたらといいと考えているが、史跡になると建物を建てる際には色々制約がある。まずは坤櫓を建てつつも、史跡指定についてどういった方法がよいのか専門家の意見も踏まえ、少し検討していきたいと考えている。
　今すぐ史跡にするというわけではなく、将来の史跡指定も見据えながら櫓の復元を考えていきたいと思っている。

（仁科委員）
　文化庁から石垣に関する安全性確保の考え方で、『文化財石垣耐震診断指針(案)令和５年７月 文化庁』がでているが、この委員会が始まったころからずっと(案)のままになっている。文化財課の方もいるので、どうなっているのか分かる範囲で教えてほしい。

（事務局（生涯学習・文化財課））
　先日文化庁に確認を取ったところ、最新は令和 6 年 9 月 26 日事務連絡の「文化財石垣基礎診断実施要領(案)の公開について」であり、文化庁でもＨＰでダウンロードできる。
　調査官に（案)が取れるのはいつ頃になるか等を確認したが、文化庁では「現状は(案)つきのまま公開している。これが最新であり、現状は（案）つきで取り組んでいってほしい。」といった回答を得ている。

（吉田委員長）
　文化庁もまだ結論を出していないのではないか。

（仁科委員）
　きちっと出してくれればと思う。個人的には福井城を国の史跡にしたいという最終的な目標がある。後から文化庁の指針に指示に従わずにやっていると言われると困る。確認して進めておいたほうがいいと思い、今確認をした。
　生涯学習・文化財課が確認して、文化庁がそう言うのであれば、(案)のままで意見を取り入れながら、今この工事を進めていくということで仕方がない。後から何か言われると嫌なので。(案）が出てきた時、熊本城の災害があり、何か考えなければいけないということで国も発出したと思うが、土木工学的にいろいろな問題が出てきているようで、そう簡単にはいかないということもあるのだと思う。

（吉田委員長）
　荒井委員、石垣に関して意見や質問はないか。

（荒井委員）
　検討段階のところもあり、現状はこの内容になると思う。

（仁科委員）
　桜について、工事に支障があるものは切るという案だが、これまで財産活用課と伐採等を協議してきた。県庁の桜はここ 3～4 年ぐらいが一番見栄えがいい。特に御本城橋から御廊下橋の並びが今ものすごく綺麗に見える。県民が見ているため、財産活用課と相談して伐採は慎重に行って欲しい。

（吉田委員長）
　坤櫓のところにある松の木 4 本は伐採するということですよね。土塀の内側にある松の木 3 本はあまり恰好よくないのではないか。松の木は伐採し、桜で統一するというような方法はないのかと思った。松の木は上の方が切れている気がする。マツはなくてもいいのかなと思った。

（仁科委員）
　松はだいぶ手入れしたもので、高さを調整するために切った。やはり、切ったのかという意見が出てくる。エノキ等は切ってもあんまり意見は言われない。石垣の委員会では今年切る木が提示されて、みんなで議論して進めている。エノキの木は早く大きくなり、石垣の方に張り出すためだいぶ切った。

（吉田委員長）
　山里口御門を整備した時も同じように仮設ヤードを作ったが、前回の反省や問題点等を受けて新たに考えたことはあるか。

（事務局）
　前回の山里口御門復元に比べて、仮設ヤードの面積が 2～2.5 倍ぐらいになっている。水循環用の仮設水路が前回は暗渠排水管としていたが、今回はアオコ対策としてオープンの仮設水路で、幅が 1.5m×高さ 70～80cm の大きめの仮設水路を利用することで、水の循環を良くすることを考えている。夏場のアオコが発生する時期には、仮設ポンプを何台か設置してアオコ対策をしていくことを考えている。

（吉田委員長）
　期間も長くなるため、その辺も配慮していかなければ問題が出てくる気がする。先程、散策通路については指摘があったが、エレベーター棟について意見や質問はないか。

（仁科委員）
　坤櫓の整備に伴って、雁木の階段は触らないと考えてよいか。雁木の階段から土塀部に上がっていく人が結構いるのではないのかと思う。傷んでいるところや開いているところがあるため直すのか思ったが、警察本部のところから土塀部には上がれないようにするということでよいか。

（事務局）
　その通りです。

（吉田委員長）
　本来は坤櫓から御本城橋まで土塀があったが、整備イメージ図を見ると切れているように見える。復元後にお堀の南西から写真を撮ろうとした時に、右側（坤櫓東側）の対処法も何か考えないと切れているような気がして、少し気になる。
　2、3 間だけ土塀を作るというのも変だと思うが、何かいい方法はないか。散策路側の堀側の柵とうまく対応するように整備を行うのも一つの方法だと思う。

（２）坤櫓の利活用について

（仁科委員）

坤櫓の杭基礎の構造上、発掘で見つかった礎石は残せず、一面掘削して基礎を打つために礎石を全部壊さないといけないということで活用案が出ているが、文化財保護サイドの生涯学習・文化財課や埋蔵文化財調査センターと、どう活用するのか資料を見極めながら進めてほしい。

展示しないなら展示しないで次の段階もある。活用する目途が立つまで保管しておくという方法もあるため、今の展示でなければならないということはなく、じっくりと協議して進めていただきたい。

（後藤委員）

角の部分の基礎石の配置が素晴らしいなと思っており、その部分が見れるのか見れないのかが気になっている。全部取って保存してしまうと見ることができない。雨ざらしにすると傷んでしまうかもしれないが、散策通路で横の部分は笏谷石で真ん中の部分はコンクリート等の滑りにくいものでという提案が先程委員からあったが、コーナーの部分にこういうものを敷いて、見ることができるようにするのはどうか。

（仁科委員）

それはこれから協議していけば、考えられる方法はある。

（事務局）

礎石と併せてＬ字型の部分も耐圧盤のコンクリートを施工する際に撤去する必要があり、笏谷石自体はなくなる。礎石をそのままどこかに展示するといった意見もあったので、検討していきたい。

（荒井委員）

以前、笏谷石の凍結融解試験というものを実施したことがあるが、笏谷石は凍結融解に対して比較的弱い石であった。加工に使われる御影石等と比べると非常に弱い。礎石をそのまま配置して保存するのが良いと思うが、排水等を工夫して笏谷石の中に水が溜まらないような状態にしなければ劣化が進んでしまうため注意してほしい。

利活用にあたって朝倉氏遺跡では遺跡の保存活用計画が策定されている。文化庁にそういう遺跡の保存活用計画のマニュアルがあると思うが、そのようなマニュアルや他の遺跡の保存活用計画は利活用の検討で参照しているか。

（事務局）

他城の事例は調べているが、朝倉氏遺跡の保全活用計画は把握していない。他城の事例や他の史跡の活用計画等を調べて利活用に活かしていく。

（荒井委員）

しっかりと考えられている例もあるため参考にしてほしい。

（景山委員）

櫓の中には常にスタッフはいるのか。車いすの昇降機等の使い方が分からない時はどうするのか。

クラウドファンディング用の商品等を櫓で販売することができれば、観光客が御城印等を購入することも可能だと思うが、その場合は誰かがいる必要がある。そういった予定はこれから検討するのか。

（事務局）
現時点では人は配置しない予定であり、防犯カメラ等を設置して何かあった場合に駆けつけるといった対応を取っていくことを考えているが、今のご意見を受け、歴史の関係団体などとも相談しながら、どのように展示、PR していくか考えていきたいと思う。

（景山委員）
１、２階のスペースでセミナーやワークショップを行う場合、多くの椅子やスツール等も必要になると思うため、階段下の倉庫に置いておくといった活用の仕方もあると思う。

（吉田委員長）
櫓に歴史関係のボランティアさん等に常駐してもらうことは無理なのか。ボランティアさんは福井市しかないのか。

（事務局）
福井市の歴史ボランティア語り部の方等に福井城の案内等はしてもらっている。県にはボランティア団体はないため、語り部さん等のご意見を聞きながら、検討していきたい。

（吉田委員長）
熊本城等の場合は、内部の展示や活用で別に委員会を作って協議している。事務局の方で考えていけるのであればよいが、例えば、展示や活用に関わっている専門家の意見をききながら、委員会みたいなものを設けてもよいかもしれないと思う。

（後藤委員）
朝倉氏遺跡と福井城の大きな差は、江戸時代の福井城の物語があまり知られておらず、ファン層が少ないことだと思う。朝倉も少ないが保存会が働きかけをして、「専門家朝倉市」をやるからと呼びかければ集まる事業主がいる。福井城の場合は福井城を中心として活動する人たちや、熊本城のように出資する人が少ないと感じている。
気運醸成や興味関心がある人を増やすと書いてはあるが、ここは交通まちづくり課だけではなく文化課や魅力創造課と協力して、例えば物語的なものを製作して、映画化することで、その時代のファン層が出てきたり、「こういう人がいたんだ」と県民に知ってもらうことができる。そうやって見て一緒に感動しないとファン層は作れない。語り部に語ってもらえばファン層が増えるわけではなく、コアなファン層を作るためにはストーリーを見せていくことが非常に必要だと思う。
逆にストーリーを打ち出す時に見に行く場所がないと制作できないという事情もある。出版業界等では、出版されることによって人が動くということを前提にしており、幕末のデータが多くありながら福井の物語がない理由は、動いた時に見に行く場所がないからだと聞いている。そのため、物語を展開した時に坤櫓を見に来るという想定で利活用を検討することも必要だと思う。
そう考えると委員長の意見のとおり、どのように活用するか、ストーリーや物語、映像でどう見せてい

くのかを別で検討していかないと、県民の気持ちがついてこられず「なんで作ったんだ」という問題が起こる可能性があるため、その前に同時教育が必要だと感じている。

（景山委員）
　工事を行っているときからキャラクターを立てて、SNS で随時情報発信を行い、併せて歴史の紹介をしていけば、まず県民の人たちから「福井城ってそんな歴史があったんだ」ということに関心を持ってもらうことができる。笏谷石の募集やクラウドファンディングでも、今から始めるというところから一緒にやりましょうと発信していけるとよい。

（仁科委員）
　二人の意見のとおりであり、そこが金沢に負けている。

（後藤委員）
　石川県の場合は、北國新聞社が「ACTUS」という雑誌で、「おてんばたま姫様」という 3 代目城主の奥様の漫画を連載や、シンポジウム等で城主と家臣団の子孫を招く等、歴史と結びつける運動を長い間重ねている。どのような経緯で出来たか、どのような思いでこれを作ったのかを県民と共有するために、殿キャラに語らせるといった見せ方も必要だと思う。
　金沢は前田利家という象徴的なキャラクターが１人いるため、若年層でも「前田の殿様のため」というが、福井県の場合はそれがない。去年は結城秀康の生誕周年だったが、盛り上がりを作れず、ファン層を作れなかったことは本当に大きな問題だと思っている。
　ものができればファンが生まれるのではなく、今から生み出していくから福井の歴史を楽しむという人を一緒に育てるということが大事だと思っており、それには相当の工夫とか仕掛けが必要になる。

（吉田委員長）
　二人からの意見はこれからの展示や公開、活用の重要要素になってくると思う。特に令和７、８年度にそういった活動・利活用を検討していくことになるため、意見を反映させながら計画を練って欲しい。

（後藤委員）
　フィルムコミッションでどこまで使えるか、カメラ写りはどうか、合成しやすいか等のフィルムコミッションの活用に対応する視点は持っているか。

（事務局）
　その視点は欠けているため、検討していく。

（吉田委員長）
　利活用で展示する・ものを置くというだけはなく、その裏側を含めたストーリーを考えながら進めていくためには、展示委員会や活用委員会があるとよいかもしれない。